

1. 作詩

1739年、この讃美歌の作詩者は、チャールズ・ウェスレー（Charles Wesley, 1707 - 1788）で、彼自身が著した讃美歌集に「クリスマスの讃美歌 "Hymn for Christmas-Day"」として登場しました。

彼は、生涯で6,000を超える歌詞を書き、その多くが現在も世界中の教会で歌い継がれています。彼の讃美歌は福音覚醒運動（メソジスト運動）の会衆が共に歌うことを目的として作られ、歌詞は聖書の言葉や物語に深く根ざしており、深い教義的（神学的）内容と、個人の回心や信仰体験に基づいた情熱的で詩的な表現に特徴があります。

ところで、初出版時（資料2-1）の歌い出しへ "Hark! how all the Welkin rings / Glory to the King of Kings" となっていて、今日世界中で愛唱されている歌詞 "Hark! The Herald Angels sing, / 'Glory to the new-born King"（資料2-2）と違っています。

2. 二度に亘る歌詞の改訂

1754年、冒頭二行の歌詞が、ジョージ・ホワイトフィールド（ホイットフィールドとも表記、George Whitefield、1714 - 1770）により改訂され「社交礼拝のための讃美歌集、Collection of Hymns for Social Worship」に掲載されました。

このホワイトフィールドにとってチャールズ・ウェスレーは信仰の師であり親友でもあり、二人共英國国教会の司祭でした。彼らは当時としては異例の野外説教を行い、メソジスト運動の創始者たちとしてイギリスとアメリカ植民地で広範なリバイバル（信仰復興運動）を巻き起こしました。

1782年には、二度目の改訂で、ホワイトフィールドによる冒頭二行が各節の終わりで繰り返されるようになり、the Tate and Brady版『ダビデの詩篇、New Version of the Psalms of David』により出版され、今日の讃美歌の形が整いました。

3. メロディが付けられ全世界へ

そして1855年頃、イギリスの音楽家ウィリアム・H・カミングス（William Hayman Cummings、1831 - 1915）が、メンデルスゾーン作曲カンタータ『祝祭歌』（グーテンベルク・カンタータ、作品68、グーテンベルクの活版印刷術発明400年記念祝典用）の第2コーラスを編曲し、この讃美歌のメロディーとしました。そして1861年に出版された『古今聖歌集、Hymns Ancient and Modern』に収録され、全世界に普及しました。

その後「Hark! The Herald Angels sing」は英國国教会の四大讃美歌の一つとされ、ケンブリッジ大学キングス・カレッジ・チャペルで行われ BBC により生放送される「ナイン・レッスンズ・アンド・キャロルズ」では、サー・デイヴィッド・ウィルコックスによる第3節の編曲と共に長年退場歌として歌われてきました。

この讃美歌には数え切れないほどの歌詞や編曲があるそうですが、日本では1903年の讃美歌第60番「かみにはさかえ」、1954年の讃美歌第98番「天には栄え」、讃美歌21第262番「聞け、天使の歌」、日本福音連盟の聖歌第123番と聖歌の友社の聖歌（総合版）第71番「聞けや歌声」、カトリック聖歌第652番「あめにはさかえ」、日本聖公会聖歌集第81番「神にはさかえ」、その他には、新聖歌79番、教会福音讃美歌89番、新生讃美歌167番、教会讃美歌30番、希望の讃美歌39番として収録されています。